



Clostridium の証明は出来なかつた。以上と同様に抗毒素血清を使用しなかつた左の例中前二例は比較的壊死に陥り、右部分が狭かつたので、壊死部の切開を放し、O.H.P.のみで全快した。右の例は広範囲の壊死に陥つて右二と十分を皮膚の切開が得られなかつたので、壊死組織周辺の組織PO<sub>2</sub>が十分に上昇せず、患者がClostridiumの発育に好適な培地となり、死したと見られる。完全に壊死組織が除かれ、O.H.P.により組織PO<sub>2</sub>が上昇すれば、その組織はClostridiumの発育に不適な状態となり、病状の進行を止めることが出来ると考えられる。実験的にも菌浮遊液をマウスの大脳筋肉内に注射し、その後O.H.P.を行なうと結果発症が抑えられる等の効果があることが判った。右の他の実験で臨床応用範囲のO.H.P.では菌を死滅させる力がないことも判った。この左の臨床応用範囲のO.H.P.では菌を死滅させるのではなく、菌を静止の状態にして生体がその後菌の発育に不適な状態となり、ガス壊死の進行を止めることが出来る。故に壊死部が広い場合には患者の切開又は皮膚の切開を放す等十分を外科的処置を行うのが望ましい。Toxic shockの状態にあるものに対して抗毒素血清を使用せず、O.H.P.を施行してもO.H.P.中、その直後の割合を安定した血圧脈膊数、呼吸数を得られるが、既に産生された毒素を除去してはO.H.P.は解毒力は持っていないと思われる。この事も実験的に証明された。犬を用いてCl. welchiiのA型菌毒液の最少致死量と静止し所謂Toxic shockを起させてその後全退したO.H.P.群とエントロウ群を比較した。エントロウ群は早期に血圧が下降し死亡したが、O.H.P.群では一旦Shockレベル迄下降する期間もなく軽微に回復してO.H.P.中はその血圧も維持したが、O.H.P.後は下降し死亡した。又A型菌毒素の稀釈液をマウスの尾静脈内に注射しO.H.P.を施行したのが全例死亡した。Lecithovitellin-reaktionでもO.H.P.の効果は認められなかつた。この様に抗毒素血清は必要に応じて使用するべきであると考えられる。

以上7例の臨床経過と実験からガス壊死に対してO.H.P.を応用する際、O.H.P.可能と考えるのは誤りで、次の様子を事に留意すべきである。

- 1) 壊死範囲の狭い早期のものにはO.H.P.のみで治療可能であるが切開を放す外科的処置も加えなければならぬ。
- 2) O.H.P.でも完全に壊死を起した組織は回復しないので完全に壊死を起していると思われる組織は早期に切開を除去すべきである。
- 3) Toxic shock状態にあるものや壊死部分が広く且、切開を除去するに足らない場合には抗毒素血清を使用すべきである。

抗毒素血清使用4例

症例No.	1	2	3	4
年齢	17	48	31	8
性別	男	男	男	男
原因	皮膚病	皮膚病	皮膚病	手術後
証明菌	Cl. welchii	不明	不明	Cl. welchii
手術部位	皮膚	皮膚	皮膚	皮膚
DHP子菌数	切開	切開	切開	切開
手術の回数	1	1	1	1
手術の回数	8回	3回	3回	6回
DHP回数	1	3	2	2
結果	治	治	治	治

抗毒素血清使用3例

症例No.	5	6	7
年齢	48	62	59
性別	男	男	男
原因	皮膚病	皮膚病	皮膚病
証明菌	Cl. welchii	不明	不明
手術部位	皮膚	皮膚	皮膚
DHP子菌数	切開	切開	切開
手術の回数	1	2	3
DHP回数	1	1	1
結果	治	治	死

